金研寮

情報企画室広報班

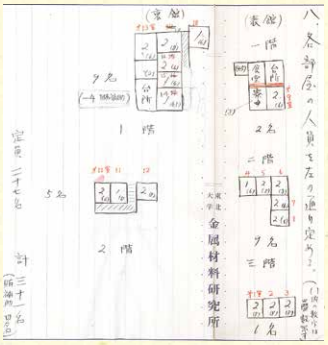

図1: 金研寮規定に記されていた花京院寮間取り図

1. はじめに

その昔、金研には所に勤務する教職員や学生の住居として金研寮がありました。1945（昭和20）年に設立された寮は1963（昭和38）年まで花京院にありましたが、その後、八木山に移転して1983（昭和58）年まで存続し、職員や学生が同じ屋根の下で寝食を共にしました（本稿ではそれぞれの寮を「花京院寮」「八木山寮」と記します）。金研寮は財団法人金属材料研究所奨励会（1940（昭和15）年設立、以下、奨励会）が運営を担っていました。奨励会の財源は金研職員が出願した特許権実施料で、金研寮の運営をはじめ、研究助成費や人件費などに支出されました。本稿では、2015（平成27）年2月19日に開催された金研寮OBによる座談会と、OBが保管していた記録や写真、そしてかつて「研友」に掲載された金研寮に関する記事[1-2]をもとに、「金研寮」を紹介します。

※本稿に登場する寮関係の方々のお名前につきまして、本多光太郎先生以外は敬称を略させていただいております。また、お名前の後の（）内は当時の所属です。

2. 金研寮の始まり～花京院寮

花京院寮は、当時の住所で仙台市花京院通り75番地の1にありました。金研工場OBの佐々木栄一氏は次のように語っています。「寮は1945（昭和20）年の終戦後に開寮しました。同年の5月か6月頃に当時の所長であった本多光太郎先生と事務長らが建物の下見に行き、本多先生の『いいわなあ』という一言で購入が決定したといいます。木造三階建ての当時でも十分に古い建物でした。購入したのは金研ではなく、財団奨励会でした。終戦前に買い取りが完了し、寮生入寮は終戦後でしたが、実は入寮第1号は戦時に家族が疎開に出て単身となっていた当時の事務長で、終戦直前の7月頃から終戦直後まで入寮していました」[1]。一方、OBが保管していた記録の中に、「金研寮規定」（写真1）と記載された冊子があり、その表紙には「昭和20年4月1日発足」と記され、佐々木氏の記憶と若干のずれがありますが、おそらく開寮は終戦直後と考えられます。花京院寮の敷地は124.45坪で、3階建延83.72坪の通り（空堀町通り）に面した建物と、その裏にある2階建延54.75坪の建物の二棟からなっていました（図1）。各棟の所有者は異なり、本来は旅館として使用されていたそうです。

写真1: [左]金研寮規定　[右]金研寮日誌

27名の定員に対し、当初入寮者は少なかったそうですが、時を経てすぐに満室となり、以後この状態が続きました。寮生の食事の用意をして下さる「賄のおばさんたち」は、最も多い時には4名いました。元寮生の能登宏七氏（袋井研・武藤研・超電導材料開発施設）は「消防署から『木造3階建ては火が出ると10分で全焼するから早く立て直せ』と再三注意を受けていました」と回想し、その古さは相当なものだったようです。また「金研寮規定」には、「火災予防の為、ヒーター類は禁止する」との記述があり、住人である寮生も安全面に注意を払っていたと考えられます。一方、元寮生の大橋正義氏（広根研・渡辺研）は「何しろ古い建物でしたので、窓は完全に閉まらず、冬は吹雪くと隙間から雪が吹きこんできていました。寒い時期は、外から帰った後、オーバーと手袋をつけたまま机に向かっていました」と回想し、当時の寮生は、冬は寒さに震えながら生活していたことを窺い知ることができます。さらに、元寮生の平林眞氏（小川研・平林研）によると、「各部屋に暖房はなかったものの、食堂には『いろり』があり、火箸で炭火をおこしながらいろりを囲んで、夜を徹して真面目不真面目な論議を繰り返していました」[2]とありますから、冬の寒さは、逆に寮生の一体感を醸し出したのかもしれません。

寮生は金研の職員としての節度も心得、「金研寮規定」には「禁止事項」として「1. 安眠の妨害、2. 勉強の妨害」と明記されています。それによると「さわいでいい時間を左のとおりと定める。大きな音を出しても良い時間は、平日は夜9時まで、土日祭日は夜12時まで」と決められていたことがわかります。

寮には風呂が無かったため、寮生は当時の白百合学園付近の銭湯に通っていました。大橋氏によると「ぬれたタオルを下げて銭湯から帰ってくると、冬は寮に着くまでにカチンカチンに凍っていました。銭湯に行くか、金研敷地内にあった工場技官が使用していた『むつみ』のお風呂に入らせてもらっていました」とのことです。

花京院寮は繁華街から近い上に、金研から徒歩20分程度でしたので、研究室所属の寮生は、夕食のために一旦寮に戻って食事を済ませ、再び金研に出かけて実験を再開していたそうです。一方、事務や技術部所属の寮生は夕方に帰寮して、夕食後に麻雀に興じることが多く、夕食を取りに来た研究室所属の寮生はその誘いを「泣く泣く」断って、実験のために金研に戻っていたそうです。仕事の帰りには、道すがら繁華街で一杯飲むことも可能で、寮は格好のロケーションだったことでしょう。

3. 花京院寮から八木山寮へ

奨励会の1962（昭和37）年2月26日開催の理事会議事録「第5案 その他」において[3]、「一. 寮の維持について」が記載されています。それによると、「現在の寮の建物は、昭和初期の建物によるもので、老朽化甚だしく火災、風害等に対する心配も大きく、消防署より注意の点もあり且つ維持費も相当嵩んできているので、この際何らかの措置を講じ万全を期したい旨の提案があり審議の結果、大体の意見は次の通りである。」とあり、事故防止のために、郊外の代替地（新寮）が記述されています。そして、新寮では入居者から公務員宿舎と同程度の部屋代を徴収する、入居期間の制限を設ける、現在の寮に対する新規入居は理事会の許可なくしては認めない、の三点が明記され、現在の居住者の実態調査を行った上でさらに協議するとして締め括られています。

さらに議事録では、「処分を必要とする事由」において、「1. 現状」として「（前略）本会において現在地において建物の改築を行うためには多大な建築資金を必要とするも本会にはその資金が無く実現不可能なので毎年相当額の修繕費を投入して応急的改善工事を行ってきたが、現在に及んではこのような姑息な手段では最早人命の安全を保し難くなったので、この際早急に処分することを決したい。」と記述されています。その上で、「2. 今後に対する措置」として、「現在の財産は、地理的に比較的便利な所に在り、売却価格も有利であるから現状のままこれを売却し、新たに交通は若干不便の地でも地価の低廉な所を買収し此処に売却差金をもって建築をして復元をしたい所存である。」と記述されています。また、「売却の場合の価格について」宅地6,844,750円、3階建坪83.72坪建物452,088円、2階建坪54.75坪建物547,500円で合計7,844,338円が記されています。奨励会理事会議事録で、寮についての記載が登場するのは、1962（昭和37）年11月29日開催の理事会議事録まで記録がありません[4]。この議事録には「金研職員寮の新築について」において、「予て粟田組の工事契約中の職員寮の新築についてその経過を報告諒承された。」とあります。花京院寮の廃寮後、新寮建設に至るまでの詳細な記録を奨励会議事録に見つけることはできませんでしたが、研友61号の平林眞氏の記事から[1]、新寮（八木山寮）の土地

230万円と建物542万円との記述がありますので、新寮建設は花京院寮の売却で成し遂げられたと考えられます。

4. 八木山寮〜ピカピカの建物へ

花京院寮に住む寮生の新寮への引越しは、表通りに面した3階建ての建物の2階から荷物を、大型トラックに積み込み、1日で終えたそうです。そして1963（昭和38）年4月に待ちに待った新築の「八木山寮」が開寮しました。八木山寮は松林に囲まれた2階建ての鉄筋コンクリートの建物で、当時の住所で長町字長嶺（現在の八木山弥生町）にあり、市営バスの八木山路線の終点「八木山神社前」のバス停前にありました。町の中心にあった花京院から八木山への移転は、寮生にとっての寮の利便性が大きく変貌しました。とりわけ、通勤・通学の足である市バスの八木山方面への最終便は20時台だったため、最終便の時間を気にしながら、仕事や実験を進めなくてはならないというストレスがあったようです。

花京院寮の寮費は食費のみでしたが、上記の奨励会理事会議事録にあるように、新寮では公務員宿舎並みの部屋代と光熱費が徴収されることとなりました。花京院寮時代も簡単ではなかった寮費徴収のための計算が八木山寮ではさらに複雑となり、会計幹事はその算出に時間を割いたそうです。こうしたこともあり、八木山寮を自治寮にするかどうかについて奨励会との間で白熱した交渉が繰り広げられたそうです。

新寮の部屋数は11室で、寮長の部屋である4畳半の8号室を除いてすべて6畳の2人部屋でしたので、定員は21名でした（図2）。寮の入口正面にある集会室は、寮生間の憩いの場で、ダンスパーティーなどの会場としても使用されました。花京院寮時代の「いろり」は無くなりましたが、寮生が集い親睦を深める精神は新寮になっても自ずと引き継がれたようです。

新寮食堂の廊下を挟んで向かいには賄さんが住んでいました。食事は1日2食用意されましたが、夕食を食べる権利は24時で消滅するという決まりがありました。清水眞人氏（小松研・分析コア）は「味噌汁は夜中近くまで残っていましたが、何度も温めるからいつも豆腐が茶色になっているんです。たまに18時頃に帰ってくると、豆腐が白く、豆腐はもともとは白い物であることに気付かされたということがありました」と回想しています。また、進藤大輔氏（平林研）は「冬場は特に、食事のおかずが冷たくなっていたわけですが、みんなが食堂の小さなストーブでそれらを焼いて温めて食べていました。独特の焦げ目が付き、おいしく感じられたことを覚えています」と語っています。門限の24時になると、玄関に鍵がかけられました。「遅れると1階の住人の窓をトントンとたたき、開けてもらっていました」と吉田肇氏（広根研・高圧物性）は述べています。

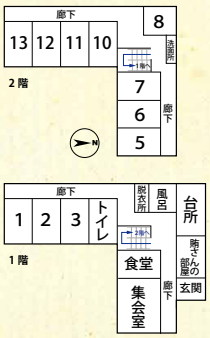

図2: 座談会出席者の記憶から書き起こした八木山寮間取り図。1階階段下は物置、西側の廊下には隙間なく洗濯物が掛けられていた。

八木山寮には風呂があり、寮生が当番制で掃除や湯沸しなどの管理を行っていました。風呂のボイラーの音と振動が大きかったため、ボイラーの稼働時間を決め、ボイラー近くに部屋のあった賄さんへ配慮していたそうです。また、時とともに寮にも文明機器が購入され、最新式の自動洗濯機が備え付けられると、1階と2階の西向きの長い廊下は洗濯物が隙間なくかけられました。

寮生には酒豪が多く、お酒を飲みながら朝まで語り合ったことも多かったそうです。「花京院寮もそうでしたが、みんなお酒をものすごく飲むし、徹夜麻雀もしていました。実験か麻雀で毎日のように徹夜していました。平日は徹夜、日曜は合ハイ、ダンパの生活でした」と能登氏は回想しています。リクレーションやスポーツの集いも盛んに開かれ、とりわけ所内女性陣の「さぼてん会」との、合ハイ、ダンパ、海水浴、芋煮会、樹氷を見る会、スキーなどは日々の仕事で疲れた寮生にとって格好の楽しみであったようです（写真2）。「さぼてん会との企画となると、そのうちだんだんと寮生以外の技官さんたちも入ってきて、輪を広げていきました」（吉田氏）。サッカー、駅伝などの寮生チームも作られ、金研駅伝大会では、金研寮チームが優勝したこともありました。寮生は仕事だけでなくスポーツにも気概を持って一致団結して取り組み、強いきずなで結ばれていたようです。

写真2: 昭和42年5月14日合同ハイキング（松川浦にて）

5. 時代の流れと寮の変化

「私は金研入所当時は宮城県内の実家から通っていたのですが、終電が早いため入寮を希望していました。しかし入寮への競争率は高く、県外の人が優先されていたため、私の申請にはなかなか許可がおりませんでした。終電を逃すと寮に泊めてもらうことが多くなり、それが2年ほど続いた1973（昭和48）年に晴れて許可がおりましたが、もしかするとこの頃には入寮希望者が減ってきていたために入寮できたのかもしれません。入寮前から合ハイなどの交流を聞いていたので期待していま

写真3: 昭和48年7月14日八木山寮10周年記念大会（金研寮集会室にて）

したが、寮生の年齢が上がったためか、相手にされなくなり、だんだんと成立しなくなっていったことを覚えています。」と笹森賢一郎氏（附属工場）は語り、この頃から寮に対する所員の意識や寮を取り巻く環境に変化が見られ始めました。

八木山寮の周辺は宅地造成と共に開発が進みました。戸塚鉄生氏（後藤研）は「私が入寮した1965（昭和40）年ころは、寮の周辺ではホトトギスやフクロウが鳴いており非常に感動しました。夜、バスがなくなると、瑞鳳寺の脇を通って急な坂道を上る、知る人ぞ知る『金研からの一番の近道』を通って帰っていましたが、当時、そこは林で囲まれているため夜は真っ暗で、八木山香澄町のグランドが見えてくるとほっとしたものです。その真っ暗な道が、私が寮にいる4年の間にどんどん開けてきて、寮を出た1969（昭和44）年ころには住宅が立ち並ぶきれいな街になっていました」と述べています。また進藤氏は「私の入寮は1977（昭和52）年でしたが、八木山の斜面に並ぶ家並みの灯りが大変美しかったのを覚えております。私の部屋は2階でしたが、廊下に干されていた皆さんの洗濯物の隙間から窓越しに夜景を見ていました」と語り、周辺環境の素晴らしさを窺い知ることができます。

そして森田博昭氏（斎藤研・藤森研）は、「私が寮を出る1973（昭和48）年ころには、評価委員会の関係か、昔に比べると論文も多く提出しなくてはならなくなってきていました。寮生活も思い切り楽しめなくなってきていたのかもしれない」と寮の変化は、金研本体の変化と関係すると指摘しています。「はじめは賄さんが食事を出してくれていて朝夕2食、同じ屋根の下、釜の飯を食べ親近感を感じ、家族のような感じでしたが、1980（昭和55）年春に賄いさんが去ってからは食事がなくなり、釜の飯の関係が途切れ、午後7時ころまで明かりは消えていました。それがさらに寮生の減少にもつながったのではないかと思います」と、笹森氏は述べています。スキーと麻雀は寮生には必須と考えられていましたが、1970（昭和45）年ころには麻雀を嗜む人が少なくなっていました。寮生も年々減少したため、2人部屋であった部屋は徐々に1人部屋となっていきました。

そうはいっても金研寮。機会を作っては寮生が集まり、何かと理由を付けて宴会を催していました。「送別会など、折に触れて食堂に集まって飲んでいたんです（写真3）。OBが来ると、とても盛り上がるんですよね。たまに大掃除をすると、その時

に出てくるビール瓶の数がすごく、それをよろず屋（近くの酒屋）にもって行き、瓶の換金でビールを買い、その日の夜も宴会を始めるということをしていました。当時は酒豪が集まっていましたね」と進藤氏は回想しています。

6. 寮の終焉

金研寮の財源を支出してきた奨励会は高度成長期にはその収入が右肩上がりでしたが、オイルショックを契機に特許権実施料収入が徐々に減少しました。そのため金研教員の出願特許の発明奨励金や特許手数料の支払いが滞り、1978（昭和53）年には約3,000万円の未払いが生じました。折りしも、特許法が改正され、国立大学教員が出した発明特許の権利帰属は、これまでの大学帰属から少しずつ個人帰属へとシフトし、奨励会の苦しい運営に拍車がかかりました。金研寮は上述のように入寮希望者の減少に伴い、寮室に空き室が目立つに至り（終寮時の寮生は7名）、ついに八木山寮売却が決定し、1983（昭和58）年に地元のタクシー会社に売却されました。ちょうど資産インフレによるバブル発生の萌芽期であったため、売却価格は6,600万円となり奨励会の赤字補てんに貢献できましたが、金研寮関係者にとっては複雑な心境だったことでしょう。同年10月29日にお別れパーティーが盛大に行われ、多くのOBも参加し昔話に花が咲きました（写真4）。こうして花京院寮・八木山寮と38年続いた金研寮の歴史は終わりました。

写真4: 昭和58年10月29日お別れパーティー(金研寮玄関にて)

7. おわりに

本稿の執筆にあたり、関係者のお話や様々な文献を通して、金研寮の役割を考えてみました。そもそもの役割は金研に所属する職員と学生の住居を提供することですが、寮生が共通の時間と空間を共有することで、目に見えない一体感を醸成させたという効果を想像できます。とりわけ、物資に恵まれなかった花京院寮時代、生きること自体が日々の戦いであり、寮生は互いに助け合って苦難に打ち勝とうとしていたことが考えられ、寮は精神的な支えになったのでないかと推察します。英国のオックスブリッジのカレッジ制度は、教員と学生がカレッジで生活を共にし、密度の濃い指導による教育の質的向上を達成してきました。金研寮は、教員と学生に加え、事務や技術職員が生活を共にするという形態を擁し（寮生には女性もいました）、他には類を見ない珍しい形ではなかったのではないでしょうか。元寮生の座談会で、研究室所属の寮生が工場に仕事を依頼する際、共に寮生の場合は求めるところと求められるところの相互の意志疎通が円滑なため、作業の進展、すなわち研究の進捗が速かったことが紹介されました。おそらく、教員、事務職員、技術職員、学生の様々な寮生の間で、寮生という潜在意識が同様の円滑化をもたらしたと考えます。

昨今、大学では、人事の流動化の名のもと、任期制や年棒制の導入が進められ、短期間で目に見える成果が要求されています。また本所に眼を転じると、以前と比べ所内での交流が少なくなったと言われています。しかし、金研寮は無くなってもその精神を受け継ぎ、所内の多様な部署と協力することで、金研の発展につなげていきたいと考えます。

最後に、本稿の執筆にあたりお集まりいただきました金研寮OBの方々（写真5）、また奨励会の記録を調べて下さった播磨信子さんをはじめとした皆さまに深く感謝申し上げます。

（情報企画室広報班　高橋 佳子・正橋 直哉）

写真5: 平成27年2月19日 座談会ご出席の皆様（金研1号館7階セミナー室2にて）
[前列左から]能登宏七氏、大橋正義氏、森田博昭氏
[後ろ列左から]清水眞人氏、戸塚鉄生氏、吉田肇氏、笹森賢一郎氏
[左上]進藤大輔氏

参考文献

[1] 研友35号 (1977) 34.
[2] 研友41号 (1983) 37.
[3] 金属材料研究奨励会 第2回理事会議事録（昭和37年2月26日開催）
[4] 金属材料研究奨励会 第2回理事会議事録（昭和37年11月29日開催）

お悔やみ

茅野 秀夫 先生

東北大学名誉教授、茅野秀夫先生（元附属量子エネルギー材料科学国際研究センター教授）は、平成26年11月11日に逝去されました。81歳でした。

茅野先生は、附属量子エネルギー材料科学国際研究センター（大洗センター。当時の附属材料試験炉利用施設；大洗施設）の立ち上げから、御停年まで大洗施設の運営に中心となって関わられました。御停年前の10年間は施設長を担われ、現在に至る施設の骨格を形作られました。現在、大洗センターは大きな世代交代の時期に差し掛かっており、先生に薫陶を受けた、栗下裕明、鳴井實、鈴木吉光諸氏、そして私、四竈樹男などが一斉に現役を引退しますが、丁度その時期に先生が亡くなられたことに時代の大きな流れを感じております。

先生は材料化学を基盤として原子力材料の幅広い分野で活躍されました。特に有機原材料を用いた分散合金開発はユニークな試みとして国際的に高い評価を受けております。また、大洗施設の運営では、当時の原子力研究所、民間研究機関、国内の幅広い大学との間で密接なネットワークを構築され、大学共同利用の運営の新たなモデルを作り上げられました。これらの遺産は、現在も世界を先導するモデルとして我々が享受しておりますし、福島事故への対応では貴重な財産となるものと確信しております。

私生活ではたいへんに家庭円満であったため、奥様のお嘆きは如何ばかりかと推測いたします。奥様が落ち着かれた頃に、関係者で先生を偲ぶ会を持ちたいと皆で話しております。茅野先生のご冥福をお祈り申し上げます。

（原子力材料物性学研究部門　四竈 樹男）